# 五七五スケッチ

感謝を込めて

水野謙二

## はじめに

自分の俳句の技量はまだまだであり、人様に俳句を披露するとは身の程知らずだと思っています。しかしながら、俳句づくりを通じて自然をはじめいろいろなものがよく見えるようになり、季節の小さな変化にも感動を覚えたりして、心がとても豊かになった気がしています。生命の不思議に感動し、自然の恵みに感謝するようになりました。日の出に思わず手を合わせ、満月を美しいと感じ、生徒の喜びを我が喜びとすることなど、おそらくこれが彼我一体の発露といえるものではないだろうかと思っています。私は星城中学及び星城高校で七年間お世話になりました。創立者の石田鏇徳先生の建学の精神である彼我一体の教えの下で教育に携われたことを大変ありがたく思っています。本校でこれまで接していただいた皆様お一人おひとりに心から御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

　これからも俳句づくりを、五七五という制限された形式での私（わたくし）表現の場としていくつもりです。また、日本人の精神性や美意識の源流とも言える「もののあはれ」や「をかし」に通じる感性を大切にしていきたいと考えています。私の母校の先輩で詩人の茨木のり子さんの詩に「ぱさぱさに乾いてゆく心を人のせいにはするな、みずから水やりを怠っておいて」という一節があります。俳句づくりを通じて心の水やりを続け、自分の感性を豊かにしていけたらと思います。拙句に対してご指導を賜れば幸いに存じます。

水野謙二

## 新年の句

鐘の音や鳥居くぐりて去年今年（こぞことし）

年新た胎動の朝静かなり

祝砲や鴨一斉に飛び立てり

玉砂利や本殿遠き初詣

手の破魔矢（はまや）鈴の音さへも有り難し

初神楽（はつかぐら）凜々しき巫女の鈴響く

ゆく雲の真綿のごとき二日かな

新年の優しき富士や黄金色

教え子の賀状見返す五日かな

大吉の神籤（みくじ）また読む松の内

青春の手と手触れ合ふ歌留多会（中学百人一首）

## 春の句

雪嶺の遠くなりたり春霞

紅椿薄ら寒さを破りたる

いざさらば万感こめて卒業歌（中学卒業式）

卒業の決意述べる子彼方見て（中学卒業式）

願かけて狛犬（こまいぬ）笑ふ日永かな

鳥除けの鳶のごとし麦青む

蝶追ひて路地行き止まる地蔵堂

笹舟にボン・ヴォヤージュあれ蘆若葉（あしわかば）

JAL（ジャル）の文字白く照らすや春の月

春風やまどろみ誘ふ人の声

中日の通夜や帰りの風強し

白き蝶友の化身か我が家まで

春満つる潮（うしほ）の匂ひ懐かしき

春深し踏み行く轍（わだち）乾ききり

飯盒のお焦げ食せば山笑ふ（中学デイキャンプ）

五歳児が三歳抱きてこどもの日

花水木（はなみずき）散りつつ咲かす路面花

## 夏の句

古竹に巻き付く蔓や梅雨晴間

母を待つ長靴の児や梅雨寒し

雨音や目覚めて寒し夏蒲団

庭に児の毛虫毛虫と知らすなり

いつまでもグランド沸くや夏至近し

紫陽花（あじさひ）にもう一度汲む如露の水

父の日や形見の時計止まりをり

絵を描く子ら画家のごと夏岬（中学スケッチ旅行）

青蘆（あおあし）や青年のごと天に伸ぶ

子らの声扇風機より宇宙人

スコール止み蛍ふたたびメコン川（修学旅行）

ビール注げば昔のままの友となり

猛暑日や気怠き音の印刷機

酔い醒めの風や網戸の向こふより

美人画の色も褪せたる団扇(うちは)かな

夕立あと伸びする犬の大欠伸(おおあくび)

用事だけ済ませて帰る猛暑かな

## 秋の句

残暑にも真っ直ぐ伸びたる師の背中

天井に蛾の止まりをり検査前

長靴の子ら駆け回る野分あと

青空の雲も泣き顔台風禍

曇天が芝刈り日和秋の風

天高し止まってゐるごと観覧車

屋根伝ひ野良猫気まま秋日和

空高し肩車の児ヘリを追ふ

秋澄むや遠き祭の神楽笛（かぐらぶえ）

をさな児も澄まして舞ふや秋祭

秋風や更地となりぬ隣家なり

朝市の疎らになりぬ秋の昼

秋桜のか細く揺れる白淡し

鯊釣(はぜづり)のそばを大魚の悠々と

名月やをさな児肩に兎見る

止まる杭選びて群るる百合鷗(ゆりかもめ)

グランドの熱気冷ましたる秋の雨

秋雨や末吉引いて浅草寺

睡蓮（すいれん）の咲くモネの部屋秋の旅

煙立つ秋のベトナム鶏の声（修学旅行）

留守の間の根深や義母は息災に

秋の蚊の亡霊のごと付きまとい

秋冷の漁港目覚める船の音

## 冬の句

冬枯に酌み交わしけり病み上り

波に揺れ漁船眠りぬ冬の月

冬空のけむり真横に流れをり

駄菓子屋の外れくじ舞ふ冬小道

前年の賀状に耽り賀状書く

寒晴や声闘わす豆剣士

木枯しの攫（さら）ひてゆきぬ人の声

亡き母の箪笥に懐炉見つけたる

号砲に飛び出す子らの息白し（中学校健脚会）

雪道の歓声白き強歩の子（中学校健脚会）

春を告ぐ土の匂ひや深呼吸

太陽の匂ひ求めて蒲団干す

枯蘆（かれあし）やみな凜として枯れをりぬ

服脱ぎて出でたる豆や福は内

護摩壇（ごまだん）に上がる炎や鬼は外

漁船らも日向ぼこなり休漁日

夕暮の雨の匂いや春近し

三河の海（夏爐「山河集」より）

遺物なる橋鯊釣（はぜつり）の賑はへる

釣り上げし鯊（はぜ）踊るなり橋の上

黒雲は出陣のごと野分立つ

旅鳥の落穂に群るる干拓地

船縁に牡蠣殻（かきがら）白し秋日和

## 天高し（夏爐「山河集」より）

棟上げの掛矢打つ音天高し

秋澄むや砂利踏む音の近くなり

顔出して迎え待つ児や秋の雨

蜂の巣の不気味に垂るる野分まへ

歌声の天までとどく秋日和

寺多き街（夏爐「山河集」より）

をさな手に数珠からませて盆供養

鶏頭の深紅の赤に朝日差す

秋風や懐かしき人今は亡く

見上げれば蜻蛉（とんぼ）目に入る念仏堂

親亡くば盆の帰省も遠のきぬ

# あとがき

世界のトヨタのお膝元という土地柄と岡崎市が生んだ鉄鋼の父、本多光太郎博士やダーウィン賞に輝いた遺伝学者の木村資生博士、さらには岡崎自然科学研究機構の存在もあって、私がかつて勤務した岡崎高校ではエンジニア、理系の研究者、学者の道や医師をめざす生徒が多くいました。在職していた二十二年間に科学の発展に寄与できる人材を育て、天下国家を論じ使命感を持って世のため人のために尽くすことのできる人材を育てることが、岡崎高校の使命だという思いが職員の間に形成されてきました。体育や芸術も含めてすべての教員が情熱と誇りを持って教育活動にあたれることに喜びを感じていたように思います。

英語教師として、私はＴＩＭＥ誌の記事から英語の伝統文法では説明できない言語事実を見つけ、その理由を生成文法の立場で深層構造から解明することの喜びを仲間と共有し考察の結果を論考として発表し合いました。また、英語のリーディング力とリスニング力の相関についてチームで研究をし、ついには独自教材を開発しました。伝統校ですが、若い教員の多くが自分たちは学校づくりを担っているんだという気概を持っていました。学校では次代を担う若者を相手に楽しく授業をさせてもらい、趣味では山岡荘八に始まり司馬遼太郎や藤沢周平などの歴史小説や時代小説を愛読する生活をしていました。

平成十四年（二00二年）、縁あって俳誌「白桃」主宰の齋藤朗笛先生の教えを受けたのが俳句との出会いとなりました。すでに句集を上梓している旧知の冨本のりお氏の勧めもあって平成二十六年（二0一四年）から本格的に俳句を始めました。平成二十七年一月に古田紀一先生が主宰する「夏爐」の同人にしていただき、未熟ではありますが現在に至っています。六十歳過ぎからの手習いですが、「日残りて昏るるに未だ遠し」という三屋清左衛門の心境を思いつつ、自分らしく精進したいと思います。

令和二年三月吉日

水野謙二